

資料紹介 『昭和六年木脇藤次郎日記』（三）

著者	丹羽 謙治
雑誌名	鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集
巻	86
ページ	155-168
発行年	2019-03-13
URL	http://hdl.handle.net/10232/00030451

資料紹介 『昭和六年木脇藤次郎日記』(二)

丹 羽 謙 治

『昭和六年木脇藤次郎日記』(仮題、鹿児島大学附属図書館蔵)の翻刻の最終回となる今回は、九月一日から十二月三十一日の百二十二日分を翻刻して紹介する。

この四か月間は、以前に比べ日記の記載の量が少なくなっているのに気づく。その原因は藤次郎の体調が芳しくなかったためで、藤次郎は度々中江佐八郎(玉里島津家典医)の診察を受け薬をもらっている。

藤次郎は、折からの好天を受け、九月一日から「玉里邸書籍風入」を始める。例年のことなのであるう、「風入」の手順など詳細について記述はない。藤次郎は週に四〜五日の割合で玉里邸に参邸している。ところが、十月二十七日に、突然蔵から出していた書籍を蔵に戻し、風入れを中止する。理由は、島津忠承公爵が天皇の熊本における陸軍特別大演習視察に伴って来鹿するためであった。

静養中の十一月十四日、玉里邸からの使者があり、「書き物等ある為め出来るなら参邸之上用を便し只度」との依頼を受けるが、体調不良を訴えて辞退、代理の推薦を求められて「小松文雄君」か「濱田東一氏」を薦めている。小松は能書家・画家として知られている人物(画号、甲川)である。ここから蔵書の整理・管理以外で藤次郎が玉里邸で果たしていた役割が推測される。つまり、玉里家の文書の作成(清書)がその業務のひとつであったということである。

十一月二十三日、忠承夫妻が鹿児島を離れたあと、書籍整理は再開されたはずであるが、具体的な記載はない。十二月二十一日、書籍の整理(蔵書の確認が行われたであろう)が終了、藤次郎は謝金として五十円を受け取っている。鹿児島大学附属図書館蔵の『御蔵書目録』(写本)を見ると、書名の周囲に「昭四」「昭六」といった確認印が押されていることがわかる。藤次郎の行っていた作業が毎年行われていたことが推測される。

現代と同じく秋には図書館や学校でさまざまな催し(展覧会や運動会)が企画された。日記には藤次郎が関わったもののいくつか書きとめられている。ひとつは、藤次郎の盟友川村俊秀の息子で、本日記にもしばしば登場する川村純二(後、鹿児島県教育長を務める)が勤務先の清水小学校で関わった「郷土教育資料展覧会」に関するもの。十月十三日に川村から出品の件について相談を受けた藤次郎は助言を行うとともに、十七日実際に見学を訪れ、「中々よく沢山の物品書画類を蒐集しあり。池田校長や池田記者、父兄會側の盡力一通りでハなかりし事と察せらる」と高評価を日記に書き付けている。その一方で、奥田啓市鹿児島立図書館長の企画にかかる展示については奥田の依頼に応じて「顔真卿の古柏行と王陽明と徐浩の石摺三種」を貸し出した藤次郎は、図書館に展示を見に行ったが、

貧弱極まるもの也。會の目的、いづれにあるや不可解なり。館長單獨の企なる由。拓本としての價値あるもの皆無と云ひてよろし。宋拓十七帖との新聞宣傳ありしも、現代の複製本にて全くの素人企に過ず。失望せり。

と酷評を書き付けている。文学者との交流や子供向けお話の会など通俗教育に熱心であった奥田との間に距離があったことが窺える。

この他、鹿児島高等農林学校の運動会(十一月三日)や蜜柑売出し(十一月二十九日)、蔬菜デー(十二月十二日)など市民に開放された名物行事を記載していることを付け加えておきたい。

最後に、藤次郎の私生活の面の話題に触れておく。九月下旬に孫娘の典子^{のりこ}が赤痢に罹患して入院、十月三日無事退院したことが記される。また、十月十九日には、次女淑子の舅である寺師慎の死去の通知が届く。寺師慎は川辺郡知覧の開業医で、医学をウィリアム・ウイリスに学んだ人物、その子の見国^{みくに}(淑子の夫)、三千夫もそれぞれ医師となるとともに、見国は考古学、三千夫は民俗学の学者でもあった。

なお、凡例については、前回同様、前々号(一)に掲載したものを参照いただきたい。

(注)

森重孝「ウィリアム・ウイリスの門下生たち」(『鹿児島大学医学雑誌』第47巻補冊1 平成七年八月)

(付記)

本翻刻は、JSPS科研費(16H03475) 基盤研究(B)「鹿児島県の歴史資料ネットワークの実践と展開」の成果の一部である。翻刻の許可をいただいた鹿児島大学附属図書館に感謝の意を表す。

九月一日(火曜) 「天気」晴

今日より玉里邸書籍風入の為参邸す。

九月二日(水曜)

九月三日(木曜)

九月四日(金曜)

九月五日(土曜) 「天気」晴

玉里参邸。

九月六日(日曜) 「天気」晴

本日は参邸休む。

九月七日(月曜) 「天気」晴

玉里参邸、例の如し。

小松文雄君より印文孝自著壱冊惠贈ありたり。

九月八日(火曜)

九月九日(水曜)

九月十日(木曜) 「天気」晴

玉里参邸如例。淑子来る。巖一人と子守を連れたり。土産として、父母、姉へ反物一反つゝ、兄へ靴下持参せり。一泊。帰途、中江國年の母堂の長逝を、兄東夫に聞けり。

九月十一日（金曜）〔天氣〕晴

如例、玉里参邸。帰りがけ、中江氏へ悔に行く。

淑子等、昼過の便に大口へ帰り行けり。

九月十二日（土曜）〔天氣〕雨

雨天に付、玉里不参。

九月十三日（日曜）〔天氣〕晴

今日、玉里参邸。

九月十四日（月曜）〔天氣〕曇

如例、玉里参邸。午後、中江醫師母堂の告別式参拝し、帰宅せり。

九月十五日（火曜）〔天氣〕晴 〔受信〕よし子

早朝、女中を伴ひ、お墓参り。夫方町へ出、白麴、からし、漬物等買ひ、電車にて女中は歸し、予は玉里参邸。

九月十六日（水曜）〔天氣〕晴

如例、玉里参邸。

九月十七日（木曜）〔天氣〕晴

如例、玉里参邸。

今夜、祐之、満蒙活寫見物に行く。

九月十八日（金曜）〔天氣〕晴、午後小雨 〔受信〕松下氏

玉里参邸、如例。

有馬ちよ子どの来。玉里錫山勤務一件依頼之由なり。中江氏外一名、一寸弓場見二来られし由。

九月十九日（土曜）〔天氣〕晴 〔豫記〕満蒙事件／昨夜勃發／

ノ由

参邸、如例。

九月二十日（日曜）〔天氣〕晴 〔受信〕貞子

今日、日曜日にて参邸休む。

午後、中間勇二氏来訪。

貞子方はがき到達、染川氏次女病死、明廿一日葬式のしらせあり。

九月二十一日（月曜）〔天氣〕晴

今日も参邸せず。昼食早仕舞にて、染川氏に會葬。夫方折田一郎氏告別式に参拝し、終て帰宅せり。

九月二十二日（火曜）〔天氣〕晴

今日玉里参邸、如例。

今夜、のり子發病。

九月二十三日（水曜）〔天氣〕曇、雨

今朝、祐之夫婦、のり子を伴ひ、佐々木病院に診察を乞ひしに、疫痢の疑あり、縣立病院に至り診察を受け、赤痢ら敷、其儘入院。祐之は一旦帰宅、道具類持参之由。予は如例参邸。午後五時より、前鹿兒島市長上野篤氏の五周年追悼會に参列。夜入過帰宅し、入院等の消息を聞けり。

九月二十四日（木曜）〔天氣〕晴雨不定 〔豫記〕今夜帽子取違／

名刺入捨られ

今日は玉里不参。午前九時比打立、南洲神社秋季大祭に参拜。つゞきて三時より、いろは屋に於ける丁丑役記念會に出席、七時比帰宅せり。従軍者廿八名、外賛同者共七十余名。新任旅團長の時局に關スル講演、田中雄藏氏の南洲先生に關スル談話あり。中々盛會なりき。出がけ病院見舞の考なりしも、中途にて祐之の病院より歸るに行逢ひ、狀況を聞き、先づ安心に付、南洲神社より歸りがけ病院を訪問せしに、病人は眠り居たる故、恭子のみにあいさつ、慰勞の言葉を残し記念會場へ向へり。

九月二十五日（金曜）〔天氣〕風雨

今日玉里参邸せず。祐之帰宅遅き故、異状なきや不安に付様子見に出掛る為、戸口に出し時歸り来り、先づ別条なき左右をき、中止せり。

九月二十六日（土曜）

玉里参邸せず。祐吉より廿円送り来る。

九月二十七日（日曜）〔天氣〕晴 〔發信〕祐吉、寺師、／加治木

今朝、祐之、子供を連れ病院見舞、南洲神社参拜の上、鴨池へ行。午前中、村の衛生検査員、突然来り、發病者の事を聞ありたる旨を以て消毒を為す。日中の炎天に子供引廻りは懸念に付、連歸りの為、鴨池に至りしも見出さず。中島彦太郎氏宅を訪ひ、暫時話し歸る。

九月二十八日（月曜）〔天氣〕晴

今日久し振、玉里参邸、例より遅く歸る。

九月二十九日（火曜）〔天氣〕雨後晴 〔豫記〕書道全集／第廿回

拂込。

十一時前出かけ、武局にて祐吉送金請取り、半分預ケ入、夫を警察に行き、名刺捨てたる分届出置き、取調の上何分通知するとの事なり。夫がいろは屋に行、帽子の取替ありしや尋ねたるも未だなりとの事なれば、多分地方出の人ならん、裏面の印不明瞭故、近日擴大鏡持参し詳查すべしとて引とる。晋文館書店へ日本画集成六回、七回以下注文す。一時比歸り着く。

九月三十日（水曜）〔天氣〕曇 〔寒暖〕朝六十三度、冷

玉里参邸。

十月一日（木曜）〔天氣〕小雨、曇

玉里不参。午後、高麗町平原長正君の葬儀に参り、出棺見送り、帰宅せり。

十月二日（金曜）〔天氣〕曇、小雨

今日は玉里参邸。

十月三日（土曜）〔天氣〕晴

今日典子退院、帰宅せり。

十月四日（日曜）〔天氣〕晴

今日も不参。

午後、大島の人、臺司某、鹿兒島の古き話聞に來り、夕方迄五時間位談話して歸り行く。

十月五日（月曜）

玉里参邸、如例。

十月六日（火曜）〔天氣〕曇後晴

〔消しゴムで抹消〕玉里参邸如例。……

十月七日（水曜）〔天氣〕晴

十月八日（木曜）〔天氣〕曇後晴

今日玉里参邸、如例。夜入過、隣家の川野老殿、谷口哲真氏を伴ひ訪問。谷口氏は宗近とかの古刀持参、鑿定を乞はれしも、刀劍に關する智識皆無の理由を以て、意見批評等謝絶せり。

十月九日（金曜）〔天氣〕晴 〔受信〕祐吉、中□會（贈力）
今日、如例、玉里参邸。

十月十日（土曜）〔天氣〕晴

如例、玉里参邸。午後五時より師範生徒の故黒田才蔵校長時代の老人達の會合を西券末廣に開くとの通知ありしを以て出席せり。會費二円、外に黒田家老末亡人の慰安品代として三十匁ツ、酒不足二付、寄附五十匁を投す。會するもの三拾余人、同期生は重信吉十郎氏一人。二期の有村貞隆、其他は在校中の相識にあらず。余り時代の懸隔ありて左程興味を感じず。會名を従來ありし温故會繼承する旨にて、年々秋期會合の申合せあり。九時比帰宅せり。午後、川村純二氏來訪の由。

今夜の會、面識の人々は、永濱伴善、平田鉉之丞、岩田藤之丞、酒匂正己、肝付勇吉、柳田節、隈元満彦、三原直明、谷口仲太郎、石神今太等の諸氏なりき。

十月十一日（日曜）〔天氣〕晴

終日在宅。午前、川村純二氏來訪、清水校に於ける古文書展覽會に出品の件に付相談あり。亀井と蒲生の書丈を出して置たらよろしからんと答へ置けり。同人も九月方松原校ヨリ貰はれ轉任せしとの事也。

十月十二日（月曜）〔天氣〕曇後風雨

今日は玉里参邸、如例。四時半退出。雨降りにて困難せり。栗一升讓受け歸る。代金は後日との事也。加治木故柚木慶二氏未亡人死去の廣告、新聞にありたるを以て、祐之を遣はし、香奠二円贈呈せり。

十月十三日（火曜）

〔天氣〕晴

玉里參邸、如例。

十月十四日（水曜）

十月十五日（木曜）

〔天氣〕晴

十月十六日（金曜）

〔天氣〕快晴

〔受信〕寺師氏、電信

玉里參邸、如例。留主中に縣廳農林技手徳重直衛と云ふ人來訪あり。南洲、甲東の書鑒定を乞ひ、預けありたり。横濱某氏が鑒定を求めて同氏へ送り來りしもの、由。今日祐之等、大口行の準備のため、町へ出し由。彦太郎、久し振り來りし由。

十月十七日（土曜）

〔天氣〕快晴

〔受信〕春子

今朝祐之等一行六人、大口の淑子方へ行く。今日は休日なれども、天氣はよし、二日つゞく休み故、玉里參邸、仕事如例。三時少し前、九良賀野、濱島両氏と共に清水小学校の郷土教育資料展覽會觀覽に行く。中々よく沢山の物品書画類を蒐集しあり。池田校長や池田記者、父兄會側の盡力一通りではなかりし事と察せらる。五時半帰宅せり。祐之一行は、午後十時前帰宅せり。

昨日預け置かれし南洲、甲東の書、披見せしに、共に眞筆と認められず、名刺に其旨したゝめて品に添へ置く。

十月十八日（日曜）

〔天氣〕晴後曇

今日は日曜なれども天氣よき模様故、玉里へ參邸。四時過退出せり。今日は宇知瀬様（鹿兒島神社）濱下りの神事ありたり。

十月十九日（月曜）

玉里參邸、如例。留主中に大口寺師よし子を知覽の舅父死亡の通知、知覽の同三千夫氏方も同断電報ありし由。直く悔電報出したりとこの事。今夜、よし子、子供二人と姪女一人、子守二人ヲ連れて來り、一泊。

十月二十日（火曜）

〔天氣〕晴

今早朝、寺師氏見國殿、大口の正樹殿夫婦、忠雄殿は福岡より西駅着の急行にて來覽、淑子一行も一緒に迎へ、駅に集合して自働車二台雇ひ入れ、知覽の郷里へ向け出發ありたり。祐之と拙者、見送りに行き、祐之は帰宅。予は玉里に參邸、東郷氏も參邸あり。今日は御邸御家創設紀念日之由にて、御神酒等頂く。

十月二十一日（水曜）

〔天氣〕晴

今朝、玉里參邸。今日は錫山鑛開掘開始に付、九良賀野、濱島、四本氏三人とも同山へ出張の為、留守番を為せり。幸ひ東郷氏も參邸ありて兩人にて代り相勤めたり。

十月二十二日（木曜）

〔天氣〕晴

今日も玉里參邸。本夕は直営錫山起業式も昨日首尾能挙げられしに付、其慰勞かたぐし祝賀の意を表せられんが為め、酒肴を賜はる。東郷重毅

氏と兩人、邸員三人と、五人にて頂戴。夜入過、八時頃退出。自動車にて九良賀氏、中江氏へ相談に行かるゝに便乗し、專賣所角にて下車し帰宅せり。

今日午後、西田町に失火あり。

十月二十三日（金曜）〔天氣〕晴

早朝、小田かつ子、沖繩方大連への歸途来着。予は玉里參邸がけ中江國年の病氣見舞に訪問せしに、早や快氣し床上げ、客間に出られたり。暫時雑談、玉里へ參邸す。中途、総て徒歩にて乗物なしにて済ます。十一時比着せり。歸宅せしに、今朝有馬勇二妻君みよ子殿死亡のしらせありたりとの事、凶事のみつゞく事なる哉。

十月二十四日（土曜）〔天氣〕晴

今日是有馬氏葬儀の爲め、午前を出かけ加勢。告別式後、墓地迄送りかゑる。夜入過なり。

十月二十五日（日曜）〔天氣〕晴

今日は玉里參邸。

十月二十六日（月曜）〔天氣〕晴

今日も玉里參邸。

名刺入れ遺失す。電車回数券、郵便切手。

十月二十七日（火曜）〔天氣〕晴

今日は玉里參邸。倉出しの本、総て入庫。一旦中止す。公爵歸邸の爲めなり。歸途夕刻有馬氏五十日祭典に招かれ行く。九時頃帰宅。今日、加治木の貞子、優子、對馬及子守同伴来り泊る。

十月二十八日（水曜）〔天氣〕曇

今日も玉里參邸。貞子、今夜迄は滞在なり。

十月二十九日（木曜）〔天氣〕晴

今日は玉里不參。貞子、午後歸柁。

十月三十日（金曜）〔天氣〕晴 〔受信〕祐吉送金

今日も玉里不參。今日、秋季氏神祖先祭執行。

十月三十一日（土曜）〔天氣〕晴 〔豫記〕安樂散□1.10 / アトフア

ンパル2

今朝、武局にて祐吉送金貳拾円うけとり、内より直の薬二種貳円余、小杉迄買に行き、夫を図書館へ立寄り、拓本展ノ件問合せたるも館長不在、且、同氏一個の企なる由にて、館員諸氏も全く存ぜずとの事なり。

十一月一日（日曜）〔天氣〕晴

今日も玉里不參。朝より客来にて終日應對に暮らす。重信吉十郎氏、午前に来り、山之内種秀、南洲書持參。唐詩なり。相違なし。大島出身の文藝家、午後に来り、例に依り長座、文学談にうんざりさせられ、やうやく帰り行きたるに付、夕食央ばに長野十郎氏、南洲の書持參、故井上

良吉君所持のものゝ由。遺物と認むれども、至極不出來のもの、印も相違なけれど、狄中の関防不明、藤隆盛の大印なり。正確なり。夜入、薄暮に帰り行かる。

十一月二日（月曜）「天氣」晴 「發信」祐吉へ「受信」則江の写真とく

今朝、下女召連れ、お墓参りを為す。夫方中江醫師に診察を受け、葉貫ひ来る。風氣分にて不快故なり。
今夜、祐之、マラリヤ熱発生し、苦しむ。留守中、図書館より電話二度来りし由。拓本展の話なりとの事。

十一月三日（火曜）「天氣」晴後曇

今朝来、不氣分にて横臥。今日は田上小学の運動會にて、祐順、祐信兩人早朝出校。恭子は両女兒を伴ひ、あとより見物也。

午後、奥田図書館長来訪。顔真卿の古柏行と王陽明と徐浩の石摺三種を借用し帰らる。今日は例の高農の運動會なり。

十一月四日（水曜）「天氣」雨 「豫記」家屋代／手付五円入。

今日も氣分悪く、引籠り。

十一月五日（木曜）

午前、中江氏へ葉貫ひに行く。二回分、七拾弐拂。夫方図書館の拓本展覽會を見る。祐之も来合はせ、家村氏も来らる。貧弱極まるもの也。會の目的、いづれにあるや不可解なり。館長單獨の企なる由。拓本として

の價値あるもの皆無と云ひてよろし。宋拓十七帖との新聞宣傳ありしも、現代の複寫本にて全くの素人企に過ず。失望せり。

十一月六日（金曜）「天氣」晴 「豫記」午後六時／忠承公／着麿 今日も終日引籠り、静養中なり。

十一月七日（土曜）「天氣」晴
午前、地神教座頭来る。
葉取りに遣す。

十一月八日（日曜）「豫記」閑院宮様御來麿。
中江氏へ葉貫に遣す。

十一月九日（月曜）

十一月十日（火曜）「豫記」閑院宮様御出發。
午前、彦太郎来り、夜八時迄長尻。

十一月十一日（水曜）

十一月十二日（木曜）「天氣」曇
終日籠居、静養。

萬吉と徳来り、先日の隠居代十円丈引下げ呉との相談なりしも、其理由とするとところ、移轉先地所借用変更ノ為め引移し不能に付との事、可笑

き理由なれば、変な理由もあるものだと思ひ、能く／＼考へて見れと申して歸行。

十一月十三日（金曜）〔天氣〕曇、小雨

昼前、町田夫人梅子どの妹、熊野よし子との來訪。土産物、菓子と風呂敷敷與ありたり。中洲小学校の運動會あり。小雨時々ありしも、昼後方祐之夫婦、兩女兒を伴ひ見物に行く。吉太來る。

十一月十四日（土曜）〔天氣〕雨

終日在宅、静養。

今朝、玉里御邸より四元氏御使として、書き物等ある為め出来るなら參邸之上用を便し呉度との御交渉うけしも、病症餘りす切となく、到底御請申上難き旨申述べ御断り申上く。代りて執筆して呉るべき人の心當りも尋られし故、小松文雄君か濱田東一氏かゞよろしくはあるまいかと、一寸氏名と所在地をも書記して御使へ相渡す。

十一月十五日（日曜）〔天氣〕晴

今日は縣下小学校の體育大會とかにて、鴨池運動場に於て開催之由故、祐之等お墓参りかた／＼見物に行けり。

十一月十六日（月曜）〔天氣〕曇 〔豫記〕晴衣べ／春子安産／男子出生との／電報あり。

依例、臥床、日を暮す。

東京伊十院氏方、昨夜男子生れ、母子健との電報、午後一時前昼食央ば

にとゞく。午後、東京へ祝電を發す。

十一月十七日（火曜）〔天氣〕晴 〔發信〕伊十院氏／兄弟及加治

木、／大口へ

午前、中江醫師へ診察受ける為め出かけ、零時半比歸宅す。今朝より直、病氣發す。

武局にて書道全集代振替送金す。伊十院兼清氏へ男兒出生の祝辭及兄兼明殿へ春子分婉に付萬事よろしく頼む旨の書状出し、加治木の貞子と大口の淑子へ春子安産のしらせのは書出す。

無盡会社の勧誘員來る。

途中外套を荷馬車にて汚されたるに付、西田橋涯の洋服せんたく屋へ、汚落し方頼み置く。廿日に出来上り、三十匁の料金との事。

十一月十八日（水曜）〔天氣〕晴 〔受信〕寺師正樹端書／赴任ノ

報

今日も就床、日を暮らす。直、昨夜來熱氣下りたるも頭痛の為め臥床。

十一月十九日（木曜）〔天氣〕晴 〔豫記〕天皇陛下一時十分頃／

御通過、午後／五時

今日、祐之は十時半過堵列拜謁の為め、伊敷練兵場へ參向、祐順は早朝の御親閱を受くる為め、田上の青訓へ少年赤十字團として參列、拜謁。恭子以下三人の子供は、田上川堤へ御召列車拜迎の為め出たり。直、今日迄も臥床。

十一月二十日（金曜）〔天氣〕晴

今日はやゝ氣分よろしく、且、明後々日玉里公爵御出發との事なる故、昼間浴湯を用意し、沐浴を済ませ、早速床に就き静養し、明日かみつみ、ひげそりに行く豫定。

十一月二十一日（土曜）〔天氣〕晴

今日は天氣よろしき故、髪摘鬚剃に廣馬場阿多床屋に行く。行きがけ、明石屋に、明朝玉里邸へかかるかんぞ箱進上の為め、為持吳度頼み置。夫を葉貫ひに、中江醫院へ立寄りしに、今夜五時より例に依り酒を下さる事になりて居るから、是非一緒に上れとの事にて、羽織袴を車夫に宅まで取に遣し呉られしに付、參邸。市長以下、市役所側四五人、其他は例の人数、染川兄弟、新聞記者等にて、遅くまで飲方なり。十時頃自働車にて送り歸していたゞく。

十一月二十二日（日曜）〔天氣〕晴

今日、町田大将を訪問せしに、腰痛にて養生の為、市来湯の元へ一週間位の予定にて湯治に只今出發されたとの事にて不在なり。夫は是枝氏に静越お産の見舞二行く。夫は土岐氏へ土産にするかるかんまんぢう⁶⁵、春駒^{1.00}の二菓買入れ、玉里御邸に昨夜の御禮に参り、昼食の饗を受け、午後公爵と對話、緩々四方山の話申上たる後、退出。夫は御後室様の御注文、薩摩義士を題材にせる岩田徳義氏の脚本を、古本屋三軒にて先日頼み置たるを捜しに行しも、未だ手に入らぬとの事にて、空敷帰宅せり。

十一月二十三日（月曜）〔天氣〕雨

今朝十時四十五分鹿駅發の汽車にて、玉里忠承公御夫婦御出發に付、御見送りの為出かけしに、風つよく雨もつけ随分閉口せり。御發車後、早速帰宅せしは十二時前也。直ちに臥床、用心せり。

十一月二十四日（火曜）〔天氣〕晴

今日は多少氣分悪敷方にて、引籠り静養。

十一月二十五日（水曜）

十一月二十六日（木曜）

十一月二十七日（金曜）〔天氣〕晴

今朝、美坐滾石氏歸任の暇乞の為め来訪。十一時の出發に付、祐之等見送りせり。

十一月二十八日（土曜）〔天氣〕晴

【消しゴムで抹消】

十一月二十九日（日曜）〔天氣〕晴

午前、町田氏を訪ひ、面會。暫時にして西駅より電車にて玉里參邸。午前十時頃より五時半頃迄、九良賀野氏の留守番なり。棚ヶ山の御邸の紅葉觀覽を、例年之通、中江國年等の企にて本日挙行、準備の為め同所へ行かるゝ為のお留守番なり。三時前、九良賀野氏同道、草牟田町宮里

正助翁夫人なか子さんの告別式に参り、夫方帰宅。

祐之等、高等農林蜜柑賣出しに行き、沢出^{さわだ}買入れ帰る。

十一月三十日(月曜) [天氣] 晴 [豫記] 書道全集廿一回/到達

[受信] よし子、石井氏の件

午前十一時、西駅發車の汽車にて町田経宇氏夫婦出立、帰京に付、見送りの為、駅まで見送りせり。十二時前帰宅。

十二月一日(火曜) [天氣] 晴

午前の郵便方祐吉の送金到達に付、請取之上、滑川小杉薬店に至り、安楽散二円二十匁の分買ひ、夫方歩行して明石屋にかかるかん代五円貳拾匁拂らひ、夫方農工銀行にて勸債利子二円五匁拂出し頼み置。高見馬場交叉点風月堂にて、かすてら半箱一円十匁買ひ、石井元享氏の病氣見舞を為して、夫方二本松馬場濱本清太郎研師訪問、不在なり。忠吉の刀を^{見せ}暫時預り置方頼み、他縣在任中の者の頼みなる故、一応研くか否や問合せノ上、何分頼む旨、弟子へ頼み置き帰宅せり。

祐之へ八円返金す。

午後、祐之等墓参。

十二月二日(水曜) [天氣] 曇 [寒暖] 寒冷 [受信] 草道沢子

殿/死去の通知あり。

今朝出かけ、農工銀行に立寄り、昨日頼み置の債券利子うけとり、玉里参邸。今夜、御邸にて慰勞宴催さる筈にて、氣分よければ参加如何との

勧誘ありしも辞退して帰宅せり。本日、呉市在住草道沢子との死去しらせあり。拙者從姉妹の内、只一人残り居りし近親なりしが、之にて皆無となれり。
直へ二円返金す。

十二月三日(木曜) [天氣] 晴 [寒暖] 冷 [發信] 草道恒次

今朝、玉里参邸の序に、武局にて草道氏へ香奠二円、小為替書留にて送り、吊意を表す。
即刻退出、帰宅せり。

十二月四日(金曜) [天氣] 晴 [寒暖] やゝ暖 [豫記] 電車回

数券/貳円二綴

今朝、玉里参邸。東郷氏来り合せ、四時半退出、帰宅せり。

十二月五日(土曜) [天氣] 晴

今日は玉里参邸、如例。

十二月六日(日曜) [天氣] 快晴

今朝、島津久光公の命日に付、福昌寺の御墓参拝して帰る。
湯浴す。彦太郎、午後来り、夜入過歸り去る。今日より隱居家取毀に取

かゝる。

十二月七日(月曜) [天氣] 時々小雨 [寒暖] 暖

玉里参邸、如例。

十二月八日(火曜)「天氣」曇後小雨「受信」草道

玉里參邸、如例。川村氏祐三来りし由、八朔節句の件、問合せありし返事の事に付てなり。近日(ママ)

十二月九日(水曜)「天氣」雨、終日「發信」い十院兼清／太平洋

社(は)「受信」い十院兼清／土岐弘
終日在宅。竹ひしやく二つ成就。

十二月十日(木曜)「天氣」晴

玉里參邸。出がけ、火鉢底造り方及洋傘修繕頼み置く。

十二月十一日(金曜)「天氣」晴後曇

玉里參邸。歸りに洋傘修繕屋に立寄りしに、主人不在にて不得要領。夫を錢力屋に立寄りてピロ樹火鉢の二重底一枚造り貰ひ、八菱拂ひ歸る。今朝、お金、小菊の根越し三種持来る。十菱拂ひ、畠に植付たり。

十二月十二日(土曜)「天氣」雨後曇 風

終日在宅。

午後、高農第二回蔬菜デーに、祐之等一同行く。

土岐弘殿を贈り物、下駄と日本手拭一反とゞく。

十二月十三日(日曜)「天氣」朝来雪、午後停む「寒暖」寒冷

終日雪の爲め、蛰居。

十二月十四日(月曜)「天氣」晴

午前、玉里參邸。公爵を進上物に對する答禮として、千二百疋下さるとの事にて交付さる。午後三時より史談會委員會、図書館にて開會。故長丸男其他の祭典誌印刷方等の件なり。池田氏より来年一月の會に、栗原柳庵先生の話を講演して呉との話あり。確たる返事は差扣へたり。

十二月十五日(火曜)「天氣」曇

午前、酒井繁一郎と云ふ人、故伊十院彦吉氏姉君肥後氏未亡人の紹介にて、南洲先生書幅持參、鑒定を乞はる(光の月巻箱)。絹地に孝文無主等痴人の七絶なり。明治五六年以後が洲字長ク引て鈎あり。印は隆永の分にて筆や、小なりし趣に、惑ひたるも相當の出来也。十一時過迄話し歸去らる。年齢も四十前後、他國の人ならん、言葉遣ひに分れり。午後故小田十助妻君と三男(十才)と末女(七ツ)とを伴ひ来訪。かすてら一箱、鳳梨漬二罐、土産に持参なり。夕食を饗し、夜入過迄話し歸らる。来廿四日出立との事なり。白尾氏奥さん十八日に近所見知り合をするから来て呉のお招待言に来らる。

十二月十六日(水曜)「天氣」晴

午前、玉里參邸、五時過帰宅。

中江醫師へ、かすてら壱箱贈呈せり。

十二月十七日(木曜)

十二月十八日(金曜)

十二月十九日（土曜）〔天氣〕 雨

十二月二十日（日曜）〔天氣〕 晴

今日、玉里參邸。

十二月二十一日（月曜）〔天氣〕 晴

今日も玉里參邸。書籍取扱、一先つ終了せり。

今期分扱謝金として、金五拾円惠與あり。

小田氏十助未亡人來りし由。

十二月二十二日（火曜）〔天氣〕 晴

今日も參邸、調査済の書籍総て納庫済ませたり。

午後、一四七銀行にて両替をして貰ひ、床屋にて髪摘鬚剃り、夫方明石屋にてかすてら一箱づゝ、中山、九良賀野両氏へ贈り方頼み、又かるかん半箱、明朝持參の事に約束（六円五匁拂）、夫方神宮司玉子店にて車海老五聯八円にて買ひ、屈方頼み置、千石馬場角にてマルポロ二筒^{1.00}、あめ百目30買ひ帰り、夜食後六時頃より出かけ、武 岩崎弥八郎氏宅訪問。小田氏一行の明日の出發時間尋しに、夕方都合ありて廿七日門司出港に延期せよとの事申來りたるにより、廿六日午後八時過の普通列車にて西駅出發の筈の由。丸ポロと、外にモスリン風呂敷、箱入一枚、贈呈せり。八時頃、歸途に就く。

十二月二十三日（水曜）〔天氣〕 晴

今日、町へ出。

隣の園田氏甥と云ふ人來り、屋敷一件、整理付け度との申込あり。地面實測圖調査、夫によりて平和裏に解決の道を講すべしと答へたり。

十二月二十四日（木曜）〔天氣〕 晴

終日、障子張り手傳ひなどにて日を暮す。

十二月二十五日（金曜）〔天氣〕 晴 〔受信〕 春子

終日在宅、手紙書方なり。

十二月二十六日（土曜）〔天氣〕 晴 〔發信〕 祐吉へ 〔受信〕 祐吉書状

今日は大工來り、戸棚其他の工事に取かゝる。

十二月二十七日（日曜）〔天氣〕 晴、夜雨風 〔受信〕 祐吉為替

今日朝より出かけ、重信吉十郎氏へ書籍返戻の爲め、上荒田の宅訪問せしも、毎日出るとして留主なり。夫方東郷重毅氏を訪ひしも不在。娘殿へ薩摩義士を（二冊綴）返戻し、夫方石井氏の病を訪ひしに、至極好結果にて飛出して來られる位なり。安心して山形^{マユ}に至り、帽子、糸り巻、ふとん地など十円近くの品買ひ、為持貴ふ事にし、濱本清太郎刀劍研師に至り、川村氏に頼み置し忠吉の刀塗研丈済し分、一旦うけとり四円拂ひ後持歸る。

九良賀野氏方白雪二瓶歳暮として呉らる。

十二月二十八日（月曜）〔天氣〕晴

終日在宅。棚等の改修工事終了に付、書籍等片付かたにて難儀せり。今夜、小田十助未亡人等台湾に帰り方に付、八時廿六分西駅發車を見送の爲め、夕食後出かけ、發車後大口へ送る菓子買ひ帰る。別に弍拾錢あめ代、提灯一個歸途買ひ来る。10錢也。

今朝、枝来り、終日餅つきなり。

大口の注文、縫紋、午後出来上る。枝、取に行く。八十錢也。

十二月二十九日（火曜）

今朝方綾子不快。

中山多計士殿方大鯛一尾歳暮として贈與。

十二月三十日（水曜）

十二月三十一日（木曜）

（完）